

錢形平次捕物控

平次女難

野村胡堂

青空文庫

一

「八、良い月だなア」

「何かやりませうか、親分」

「止してくれ、手前がてめえ鹽しほ辛聲からごゑを張り上げると、お月様が驚いて顔を隠す」

「おやツ、變な女が居ますぜ」

錢形の平次が、子分のガラツ八を伴れて兩國橋にかゝつたのは
亥刻よつ（十時）過ぎ。薄寒いので、九月十三夜の月が中天に懸ると、
橋の上に居た月見の客も大方歸つて、濱町河岸までは目を遮さへぎる物

もなく、唯もうコバルト色の灰を撒いたやうな美しい夜です。

野暮用で本所からの歸り、橋の中程まで來ると、ガラツ八がかう言つて平次の袖を引きました。大した智慧のある男ではありませんが、眼と耳の良いことはガラツ八の天稟で、平次の爲には、これ程詔向のワキ役はなかつたのでした。

「あの女か」

「ありや身投ですぜ、親分」

「人待ち顔ぢやないか、逢引あひびきかも知れないよ」

「逢引が欄干らんかんへ這ひ上がりやしません、あツ」

橋の上にシヨンボリ立つて居た女、平次とガラツ八に見とがめられたと氣が付くと、いきなり欄干を越して、冷たさうな水へザ

ンブと飛込んで了つたのです。

「八、飛込めツ」

「いけねえ、親分、自慢ぢやねえが、あつしは徳利だ」
とつくり

「馬鹿野郎、着物の番でもするがいゝ」

さういふうちにパラリと着物を脱ぎ捨てた平次、何の躊躇ちうちよもなく、パツと冷たさうな川へ飛込んで了ひました。

女は一度沈んで浮かんだところを、橋の下にやつて來た月見船が漕こぎ寄せ、何をあわてたか櫂かいを振上げましたが、氣が付いたと見えて、水の中の平次と力を併あはせ、身投女を舷ふなべりに引揚げました。

女は激動の爲に正體ありませんが、幸ひ大して水は呑んで居ない様子、月見船の客は船頭と力を併せて、濡れた着物を脱がせ

て、船頭の半^{はんでん}纏や、客の羽織などを着せて、擦^{さす}つたり叩いたり、いろ／＼介抱に手を盡して居ると、何うやらかうやら元氣を持ち直します。

蒼い月の光に照らされたところを見ると、年の頃は二十二三、少しふけては居りますが、素晴らしい容^{きりやう}色です。

「何うだい、氣分は。少しは落着いたか、何だつてそんな無分別な事をするんだ」

平次は素^{せき}つ裸のまゝで、女を介抱して居ります。近間に居る月見船が二三隻、この騒ぎに寄つて來ましたが、無事に救ひ上げられた様子を見ると、この頃の町人は『事勿れ主義』に徹^{てつてい}底して、別段口をきく者もありません。

「有難う御座います」

顔を擧げた女、平次はそれを正面から眺めて、何うやら見覚えがあるやうな氣がしてなりません。

「違つたら謝るが、お前さんは、お樂といやしないか」
あやま

「えッ？」

女はもう一度心を取直して、橋間けうかんの月に平次の顔をすかし
ました。

「ね、矢張りお樂だらう？」

「あッ、錢形の親分、面目めんぼくない」

女は毛氈もうせんの上へ身を投げかけるやうに、消えも入りたい風情

です。男の羽織と半纏を引掛けた淺ましい姿がたまらなく恥かし

かつたのでせう。

「錢形の親分さんで、——これは良い方にお目にかゝりました。私は長谷川町で小さな質屋をして居る笹屋ささやの源助といふ者で御座います。身分不相應な贅ぜいで、生意氣にお月様などを眺めながら、十七文字を揃へて居ると、いきなり鼻の先へ人間が降る騒ぎでせう、全く、こんなに驚いたことはありません」

成程、俳諧はいかいの一つ位は捻ひねりさうな、質屋の亭主にしては、肌合いきの粹な男。錢形の平次と聞いて、いくらか冷靜さを取戻したもののか、身投女の後ろから、こんな事を言つて居ります。長谷川町の笹屋といふと、新しいながら相當繁昌する店で、商賣柄平次も満更知らないところではありません。

「お蔭で一人助けました、飛んだ功德くどくでしたよ」

と平次。

「功德には違ひありませんが、町人はこんな時は何の役にも立ちません」

「ところで、お樂、お前のやうな女が、何んだつて又身を投げる氣になつたんだ」

平次は質屋の亭主にはかまはず、船を兩國の方へ漕こがせながら、漸く心持が落着いたらしいお樂に話かけました。

「何も洒落しやれや道樂に死ぬ氣になつたんぢやありません、親分、お怨うらみ申しますよ」

「何？」

「兄の香三郎が、親分の縄に掛つて、傳馬町に送られてから、世間の人は私を相手にしてくれませんか」

「――」

「兄は泥棒かも知れませんが、妹の私は何にも知りやしません。それを町内のかまひもの構者にして、厄病神やくびやうがみのやうに追拂つたのは、何といふ譯の解らない人達でせう」

「――」

「大泥棒の妹と知れると、何處でも三日と置いてはくれません。三月の間に五軒も越して歩いて少しばかりの貯たくはへも費ひ果し、身でも投げなきア、乞食をするより外に身の振方の工夫もつかかなかつたのです。親分やお上うらを怨うらんぢや悪いでせうか」

平次も驚きました。その頃江戸中を騒がせた三人組の大泥棒のうち、一人は逃げ、一人は死に、香三郎といふのだけ捕つたのを、今年中の大手柄にして居ると、何時の間にやら、こんな飛んでもないところに罪を作つて居たのでした。

「そいつは氣の毒だ。岡つ引だつて鬼や蛇じゃぢやねえ、早くさういつて來さへすれば、何とかお前一人の身の振方位考へてやつたのに――」

「親分、さういつて下さると嬉しいけれど、私はどうせ大泥棒の妹だから」

「さうひがんどちやいけねえ、お前の身の立つやうに、及はず乍ら何とか工夫をしてやらう。もう死ぬなんて、つまらねえ心持は起

しちやならねえよ」

「――」

お樂は泣いて居りました。

「親分、土左衛門は何うしました」

輕舸^{はしけ}で摺れ違つたのは八五郎でした。河へ飛込んだ親分の身を

案じて、西兩國の橋番所に駈け付けると、船を出して貰つて現場

――橋の下――へ漕がせたのです。

「八か、何て口をきくんだ」

「それぢやお土左^{どざ}」

「馬鹿ッ」

こんな他愛^{たわい}のない掛合が、船の中の空氣をすつかり柔^{やはら}げてくれ

ました。

「親分、寒かつたでせうね、——その女は橋番所に引渡して大急ぎで歸りませう。姐御は一本付けて待つてますぜ」

「この人を伴れて歸るんだ、駕籠をさういつてくれ」

「へエ——、お土左を？ 物好きだねえ」

「つまらねえ事をいふな、——笹屋の旦那、それぢやこの女はあつしが引取つて參ります。飛んだお世話になりました」

二

平次がお樂を伴れ込んだのを見ると、女房のお靜は悪い顔をす

るどころか、自分の親身しんみの姉が、久し振りで里に歸つたやうに、何の隔へだてもなく受け容れてくれました。

まだ厄やくを越したばかり、若くて美しくて、氣立てのいゝお静は、氣の毒なほど下手したでに出て、綺麗で年上で、何となく押の強いお樂を立てゝやつたのです。

翌る日。

「此邊へ商賣用で來ました、序ついでと言つちや濟みませんが、昨夜は親分の御世話になりましたのでお禮 傍かた々々伺ひました——」
そんな事を言つて、笹屋の主人源助が手土産を持つて顔を出しました。

「飛んでもない、あつしこそお禮に上がらなきアならないところ

で」

平次はあいそよく迎へて、何くれとなく話しました。平次よりは幾つか年上でせうが、世故にも長け、文筆にも明るい様子で、この頃の質屋の亭主には、全く珍らしい人柄でした。

馬が合ふといふものか、二人はすっかり話し込んで、お静の着替を借りて着たお樂を相手に、到頭日の暮れるまで長話をして了解つたものです。

それから源助はチヨクチヨク訪ねて來ました。平次が留守だとお樂やお静や、ガラツ八を相手に冗談口をきいて歸ることもありません。

「ありや何だい、質屋の亭主だつていふが、野幫間だか、俳諧

師^しだか解つたものぢやない。あんな物識^{ものしりがほ}顔をする野郎は俺は嫌ひさ」

ガラツ八は、蔭へ廻るとこんな事をいひますが、面と向ふと、まことにだらしもなく引込んで了ひます。物識と通人は、ガラツ八に取つては一番の苦手だつたのです。

もう一人、お樂と源助を嫌ひな人間がありました。

それは、ツイ二軒置いた隣に住んで居る、駄菓子屋の娘お町。お静と一緒に水茶屋に出て居て、平次に氣があつたのですが、張合つて綺麗に敗^まけて、今でも兩國の水茶屋に通つて、女だてらに大酒を飲んで、男から男へと渡つて歩くやうなだらしない生活を續けて居るのです。

「八さん、お寄りよ。知らん顔をして通ると、此間、私を口説いたことを町内へ觸れて歩くよ」

「あツ、お町か、敵はねえな？」

ガラツ八はさう言ひながらも、悪い心持がしないらしく、縁臺に腰をおろして、お町がくんでくれた温い茶を啜ります。

「ね、八さん、あの女は何處の化物さ。平次親分のところへ入り込んで、近頃はお静さんを使ひ廻して居るツてえぢやないか」

「俺が、そんな事を知るものか。いづれ田舎の従妹とか姪とかいふんだらう」

ガラツ八は當らず觸らずの事を言つて居ります。

「近所にあんなのが居ちや癪にさはるねえ。お静さんもお静さん

ぢやないか、何だつて又黙つて眺めて居るんだらう」

「其處がお靜さんのいゝところさ、お前とは少しばかり出來合が違ふ」

「何だといえ、もう一度いつて御覽」

「何^{なんべん}遍でもいふよ、お靜さんのあのポーツとしたところを親分

が氣に入つたんだ、さういつちや濟まねえが、お町のやうにピンシヤンしてちや、親分の氣に入るわけはねえ」

「畜生ツ、何とでも言ふがいゝ。——ところで、あのお樂とかいふ女は、どうだい」

お町はかう言はれても大して腹を立てる様子もなく、お樂のこゝとを根ほり葉ほり聞きたがつて居ります。

「あのお樂と來た日には大變さ。唯もうネツトリして、にかは膠でねつて、鳥とりもち繭こでこねて、味噌で味を付けたやうだよ」

「嫌だねえ、萬一お靜さんから親分を横奪りするやうな事があつたら、このお町さんが生かしちや置かないつて、さう言つておくれ」

「少し物騒だね」

「何が物騒さ、あんな女に町内を荒される方が餘つ程物騒ぢやないか」

お町はさういつた女でした。お靜と平次が一緒になると、ゲームに負けたやうな心持で、一旦綺麗に引下がつては見たものゝ、横合から變なのが飛出して、平次へちよつかいを出して居るのを

見ると、自分がいきぎよく引下がつただけに、打ち殺しても了ひたいやうな、言ひやうのない衝動を感じる——といった性の女だつたのです。

三

四五日は無事に過ぎました。

お静は相變らずまめに立働いて、何の蔭もないやうに暮して居りますが、氣を付けて見ると、ぼんやり呆然して溜息ためいきを吐くといったやうな様子が、ちよい／＼平次にも見られるやうになつて來ました。

お樂はガラツ八がいつたやうに、少しねつとりとして居りますが、奉公人のやうに、よく働いて居ります。めかけ妾、旅藝人といった過去はあるにしても、平次やお靜の親切な仕向に折れたのでせう。見たところ、綺麗で、才さいばし走つて、身だしなみがよくて、知らないものが見たら、此方が平次の女房で、お靜を妹とも思ふことでせう。

「ね、お前さん、ちよいと」

或日、お樂の留守を見定めて、お靜は物蔭に平次を呼び入れました。

「何だえ、誰も聞いちやゐない、用事があるなら其處で話せ」
平次は少し面倒臭さうでした。

「私、こんな事はいふまいと思つたけれど、氣味が悪くて、どうにも我慢がならない。お願いだから、お金か何かやつてお樂さんを外へ預けて下さいませんか？」

「何？」

豫想外なお静の言葉に、平次は眼を睜みはりました。

「——出て貰つたつて、其日に困らせるやうな事さへしなければ、義理は濟むぢやありませんか、お願いですから」

「お前妬やいてるのか」

「あれ、そんな事ぢやありません。近頃私は此儘ヂツとしてゐると、殺されさうな氣がしてならないんです」

「——」

「昨夜裏ゆうべの井戸で水を汲くんで居ると、いきなり私の足をさらつたものがあるぢやありませんか。井桁あげたにつかまつて、井戸へ落ちるのだけは助かりましたが、氣が付いて見ると、水を汲む時立つ場所へ、縄で罫わなを仕掛けて置いて、梁はりを通して、縄の端を向うから引くやうにしてあつたんです。誰が引いたか解らないといへばそれまでですが、此邊に私を殺す氣の人が居るには間違ありません」

「――」

「それから、今朝は物置に入つてゐると、外から戸を締めて、輪わ鍵かぎをかけて心張しんばりをした上、炭俵へ火を點つつけた者があります。幸ひ氣が付いて戸を押倒して飛出し、炭俵の火が軒へ移りかけたのを、天水桶から水を汲み出して消しましたが、此様子だと、これ

からも何んな事をされるか解りません。お町さんに聞くと、二三日前にもお樂さんは、わざ／＼兩國の藥屋まで行つて、何か買つてゐるから、そつと後から跟ついて行つて見ると、岩見銀山の鼠いはみぎんざん取り藥だつたさうです、——何處で何時使ふか解らないから用心するが、狙ねらはれて居るのが鼠ぢやなからう——お町さんはさういつてくれました」

「——」

お靜のいふのは尤もつともでした。二度も三度も、明あきらかに自分の命を狙ねらふ者の細工を見せられては、どんな義理があるにしても、此上素姓の怪しいお樂を、同じ家根の下には置きたくなかつたのです。氣の弱い、物優しいお靜が、思ひ切つてかう言ふのですから、そ

れは本當によく／＼の思ひだつたのでせう。

「お静」

「ハイ」

「お前は、俺がお上から十手捕縄を預かる身分と知つて嫁に來た筈だな」

「――」

平次の言葉は以ての外でした。嫁入つてから半歳あまり、ツイ荒い言葉も聞いたことのないお静は、あまりの事に仰天して、平次の憤怒とも、疑惑ともつかぬ顔を見上げました。お静は息の詰まるやうな心持だつたのです。

「縛られたり、打たれたり、顔へ怪我をしてさへ、一言も泣き言

をいはなかつたお前が、それ位のことと、お樂を追ひ出せとは何といふことだ。矢張り嫉妬やきもちと言はれても文句はあるまい——いや、言譯は聞かない。身まで投げる氣になつたお樂を助けて、それが氣に入らないといふやうな女房は、俺の方でも考へ直さなきアなるまい。お上の御用を勤めてゐる身體には、何時どんな用事があるかも知れないのに、一々嫉妬がましい事を言はれちや、御用が勤まらないといふものだ」

「あれ、そんな積りぢや」

「黙つてお袋ふくろのところへ歸つてくれ。長いことは言はない、十日経たないうちに、何とか言つてやらう。兎に角お前が此處に居ちや、ろくな事がなさうだ。手廻りの荷物まとだけ纏めて、後と言は

ずに、今直ぐ行つてくれ。みくだりはん三行半をやるか、迎への人をやるか、

それはもう少し考へてからの事だ——無分別なことをするな」

「お前さん、そんな、そんな、——私はそんな積りで言つたんぢやありません。堪忍して下さい、死んでも私は此處を動きません」

お静はあまりの事に顛倒てんだうして、平次の膝に縋すがり附くと、赤ん

坊のやうにイヤイヤをしながら泣きました。もう二十歳はたちにもなつ

て、大丸髻おほまるまげの赤い手柄てがらが可笑しい位なお静が、平常可愛ふだんがられ

過ぎて來たにしても、これは又あまりに他愛たわいがありません。

「お静、見つともない、いひ出した事を變替へんがへする俺ぢやない。

兎も角お袋の所へ行つて、五日なり十日なり、俺の考への決まるのを待つがいゝ」

「否、否、私は否、何んなことがあつても、此處を動きやしません。ね、私が悪かつたら堪忍して下さい」

「馬鹿ツ」

「堪忍して下さい、お願い」

お静は平次の膝ひざから胸へ、首にすがりついて、たつた三つになる子供のやうに泣くのでした。

少し下しも脹ふくれの可愛らしい顔が涙に濡ぬれて、紅い唇のワナワナと顫ふるふいぢらしさは、何んな剛情な平次も、折れるだらうと思はれましたが、頑ぐわんこ固に眼を閉ぢた平次は、それをむしり取るやうにもぎ離して、

「八、ガラツ八は居ないか」

縁側の方へ聲を掛けるのでした。

「オーイ」

ノソリと立つたガラツ八も、拳固げんこで切りしきと涙を拭いて居ります。
「氣の毒だがお静をお袋のところへ連れて行つてくれ。十日経つたら、改めて平次が伺ひますつて、いゝか」

「御免蒙ごめんかうむらう」

「何だと？」

「そんな使は御免蒙らうよ」

「馬鹿ツ、突つ立つて物を言ふ奴があるか」

「立たうと坐らうと勝手だ。こんな貞女ていちよを追ひ出して、あの雌め

猫ねこの化けたやうな女と一緒にねこなる積りだらう。そんな野郎はもう

親分でも子分でもねえ」

「野郎と言つたな。馬鹿ッ」

「馬鹿の親分は野郎で澤山だ」

「畜生ッ、言やがつたな」

平次は思はず煙草盆を持つて立上がりました。

「あれッ、八さん、お前さんの方が引込んで居てくれなきア、――

――どうせ私が悪いんだから」

お静は二人の間に割つて入りました。

四

「親分、可哀想ぢやありませんか、お静さんは泣き乍ら行きましたよ。私は丁度横町でバツタリ出會はすと、お静さんをなだめく行つた八さんが、往來で私を捕まへて、そりや變な事ばかり言ふんですもの、間の悪さといつたら」

お樂はさう言つて銚子を取上げました。お静が出かけた後、邪魔する者もない心持で、ばんしやく晩酌の相手までしてゐたのです。

「お前が來てから、お静の調子がすっかり變つたのさ。氣の毒だが、御用聞の平次に、妬やく女房があつちやお上かみの御用が勤まらねえ」

「でもねえ、あんなに騒がれて一緒になつた二人ぢやありませんか。私なんか、遠くから見て居てどんなに羨うらやましかつたことか」

お樂はさう言つて、圓い顎あごを襟に埋めました。銚子を持つた華き奢やな手たが少し顫ふるへて、海千山千といった妖婦肌えうふはだの女にしては、變たかに亢たかぶる感情を押へきれない様子です。

「お前も一つやるかい、お樂」

しづく

ちよく

雫の滴れさうな猪口ちよくを、お樂は小さく兩手で受けてニツコリしました。妙あぶらに脂の乗つた艶めかしさは、嫌な言葉ですが、『ニンマリ笑つた』と言ふのが一番適當して居るでせう。

お靜きかへの着換きかへには相違ありませんが、お樂が着ると、銘仙も木綿いきも粹いきになるのです。洗ひ髪に、赤いく唇くちびる、猪口ちよくに觸さわると其儘みづか酒も紅になりさうな、それは何といふ官能的な魅惑みわくでせう。

「だけど嬉しいねえ、親分とかうして居られるんだから、私はま

るで夢のやうな心持よ」

少し馴なれ々しい口をきいて、猪口を返す手に思はせぶりな力をこめたりしました。

「つまらない事を言つちやいけない。ところで、お前にいろいろ聞きたいことがあるが、——言つてくれるだらうね」

と平次。

「親分には命を助けて貰つた上、こんなに親切にして頂くんだから何もかも言つて了ひますわ、その代り私の願も聞いて下さるでせう？」

お樂は何時の間にやら長火鉢ながひばちの向う側から、此方側へ滑すべつて、平次の身體にもたれるやうにして居るのです。

「それはもう、大抵たいていの事なら聞くが——」

「有難いわねえ、親分、一體、どんなことをお話すればいいの」

「外でもない、半歳前に江戸中を荒した三人組の大泥棒、一人はお前の兄の香三郎で、これは傳馬町の大牢たいらうに入つて居る。もう

一人は蝮まむしの三平——これは死んださうだが、——あと一人残つた

人殺しの房吉、これは頭分で、人の五六人も殺して居る。一人だけ縄目を脱のがれて、今でも人もなげに御府内を荒し廻り、この平次を白痴こけにして喜んで居る。俺はこの房吉を縛つて、江戸中の人を安心させたいのだよ」

「解りましたワ、親分、思ひ切つて言つて了ひませう。房吉は名を變へて、今では江戸の眞中まんなかに住んで、親分が死んだと思ひ込

んで居る三平と一緒に、相變らず惡事を重ねてゐますよ」

お樂の手は何時の間にやら平次の腕に巻き付いて、その少しほてつた顔は、妙に惱ましく平次の緊張した顔を見上げるのでした。「それは有難い。房吉、あの人殺しの房吉といはれた野郎と、兄弟分の三平は何處に居る、教へてくれ、お樂」

「その代り私のお願ひ、——」

「出来ることなら何でも聞く、——房吉は何處だ」
「——」

お樂が何か言はうとした時でした。

「御免下さい」

お勝手の格子が開いて、ソロリと入つて來たのは、石原の利助

の娘で、平次には日頃恩にもなり、親したしみも持つて居るお品。親の利助の病中は、その代りに子分共を指圖して、十手捕繩を恥はづかしめなかつた女ですから、見たところは弱々しい、出戻りとも思へぬ若くて美しいお品ですが、氣象きしやうや才智は、竝の男の三人分もあらうといふ女です。丁度この時、

「親分、今晚は、ちよいとお静さんのお留守見舞よ、入つていゝ？」

表からは二軒置いて隣りに住む、昔のお静の朋輩ほうばいお町、それは、無抵抗で優しいお静にだけは兜かぶとを脱いで居りますが、外の女が平次に指でも差さうとしたら、狂犬やまいぬのやうに喰ひ付いてやらうといふ恐ろしい女です。

「あツ、お品さん、——お町もかい」

平次も呆氣あつけにとられました。折角お樂の口から兇賊の住所ありかを聞出さうとして居る矢先に、こんなのに飛込まれては、全くやり切れません。

「お町もか——はひどいでせう。親分、そのもかが氣に入らないよ」

お町は自分の家のやうに入つて來ました。

「弱つたなア」

「弱つたのはお靜さんよ。あんの可愛らしいお神さんは江戸中探したつて二人とあるものか、お前さんには過ぎものだ。そんな雌め猫ねこの化けたやうな脂あぶらぎつた女めなんかと見換みかへちや罰ばちが當るよ」

「お町、口が過ぎるぞ」

「お神酒は過ぎてるが、口なんか過ぎるものか」

お町は一寸も引きさうにありません、———それどころか、長火鉢の向うへ、女だてらに大胡坐をかくと、お樂の手から猪口をちよくむしり取ります。

「さア、親分注いでおくれ。何をキョトキョトして居るのさ、これでも此雌猫よりはましだよ。お靜さんに親分を取られた時は器用にあきらめたが、親分を外の女に取られるやうな事があつちや、兩國の水茶屋の名折れだよ」

平次は苦笑ひして立上がりました。後にはお品、

「親分、お靜さんはお里へ歸つたさうですねえ」

「何處から聞いたんだ、お品さん」

「手紙が來ましたよ、頼むから一と晩親分を見張つて下さい——
つて」

「どれ、その手紙を見せな」

平次はお品の手から手紙を受取りましたが、見覚えのある手^{しゅせ}
蹟^きではありません。

「親分、此處へ泊つても構はないでせう？」

お品までがこんな事を言ひます。これはお町と違つて、叱ることも追拂ふことも出来ないだけが、厄介といふものでせう。

「こいつは面白いや。女三人で親分を真中に、睨めつこのお通夜^{つや}
なんざ洒落たものだね」

お町はすつかり喜んで居ります。

「親分、あの話は明日にしませう」

と、お樂。これも辟^{へきえき}易する柄ではありませんが、さすがにか

うなつては、何を切り出すことも出来ません。

「驚いたな、どうも、みんな歸つてくれ。御親切は有難いが、一と晩頑張つて居られちや、俺がたまらない」

と、平次。

「色男には誰になるつてね、親分、かう新造に騒がれるのも満更悪い心持ちやないだらう」

お町は柱にもたれて太平樂を言つて居ります。

五

錢形の平次もこの晩ほどひどい目に逢はされた事はありません。脂ぎった妖艶なお樂と、鐵火で阿婆摺あばずれで男のやうに啖呵たんかを切るお町と、出戻りとはいつても、美しくて賢いお品の間に挟まつて、一と晩さいなまれたのです。

朝になると、飛出して一と風呂、お品が拵こしらへてくれた飯を濟ますと、其儘てだてプイと飛出して了ひました。これより外には、女難除けの手段も考へられなかつたのです。留守は多分、お品がいゝやうにやつてくれるでせう。併し、事件は、その日のうちに急轉直下して、凄まじい終局カタストロフまで推し進んで了ひました。

その晩、町内の錢湯へ行つたお樂が、容易に歸らないと思つて居ると、

「あ、人、人殺しツ」

路地の中で大變な騒ぎが始まりはじました。

留守番のお品は飛んで出ました。お町が引揚げて了つた後、さすがにお品一人では淋しかつたのです。

「何だく」

彼方此方から人が飛出して來ました。平次の家の近く、通りから少し入つた一間の路地、一方は板塀で、一方は表を閉とぎした貸家、その先が生垣で、共同井戸で、袋路地になつて居りますから。日が暮れると滅多に人の通らないところです。

誰か手燭てしよくを持出すと、

「あッ」

皆な潮の引いたやうに退きました。恐ろしい血潮の中に、若い女が仰向けに倒れて居るのです。

「平次親分のところに居る人ぢやないか」

誰かゞ言ひます。

紛れもなくそれは、お樂の取亂した湯上がり姿に相違なかつたまぎのです。

平次は朝から留守、何うする事も出来ません。そのうちに誰が言つてやつたか、町役人が見廻り同心を連れてやつて來ました。

後ろから顔を出したのは、何うして嗅かぎ付けたか、三輪の萬七

とお神樂かぐらの清吉。お品は『しまつた』と思ひましたが、今更病中の父親を連れて来るわけにも行かず、一人で氣を揉もんで居ります。「旦那、申上げます。殺されたのは、此間から平次のところへ入り込んで居る女で、お樂とか言ふさうです。その爲に平次は女房のお靜を出したつて話ですから、いづれ、そんな事で刃物はもの三昧まいになつたんぢや御座いませんか」

萬七はすっかり好い心持さうに、お樂の死體を見たり、其邊中の人に當つたり、目まぐるしく活動しては、合間々々に同心に報告して居ります。

「刃物は何だ」

「あひくち匕首あひくちの細いので御座います、後ろから突いたところを見ると、

下手人はどうせ女でせう」

「フーム」

「妙な物を見付けましたよ、旦那、死體の側の血の中にこれが落ちてゐました」

萬七の渡したのを見ると、斑ふの入つた鼈べつ甲かの櫛くし。銀で唐草からくさを散らした、その頃にしては、この上もなく贅澤な品です。

「これはいゝ手掛りだ」

と同心。

「心當りの者に聞くと、それほどの品ですから間違はありません、平次の女房のお静の品なんださうで——」

「何？ 平次の女房が下手人だといふのか」

萬七の謎を解いて、同心も驚いた様子です。

「お靜が下手人だとは申しませんが、兎に角、この女の爲に昨夜追出されて、お袋のところへ歸つたさうですから、一應呼出してお訊き下さいまし。こんな人通りのない路地の奥へ入つて、何うして櫛くしなんか死體の側へ置いたか、その辯いひわけ解さへ立てば、お靜の疑ひはすぐ晴れます」

「フーム」

何うも萬七の言ふ事は一々皮肉です。

「もう一つこれは大した事ぢや御座いませんが、念の爲に申上げて置きます。お靜は餘程口惜くやしかつたと見えて、今日は朝一度、晝頃一度、平次の家廻りまで來てウロウロして居たさうです。

朝と晝來た位ですから、宵よひに來ないつてわけは御座いません」

「――」

いよく以て萬七の舌は毒を含みます。

併し、同心も直ぐに平次の女房に繩を打たせるわけには行きません。念には念を入れて、路地の内外、湯屋での様子、それから平次の家に留守番をして居るお品まで調べました。が、お靜を呼出して訊くより外には、下手人の見込も當りも付きさうもないと解わかつたのです。

「お靜の里といふのは此附近か」

と同心。

「ツイ其處で」

「喚^よんで来て貰はうか」

同心の許が出ると、清吉は飛出さうとしました。

六

「どっこい、それには及ばねえよ、お靜さんにやましい事があるわけはねえ」

ヌツと顔を出したのは八五郎でした。

「八兄^{あにい}哥か、錢形の親分も飛んだ掛^{かゝり}合^あひで氣の毒だな」

萬七は妙に笑ひたいやうな、泣き出したいやうなしかめつ面を見せます。――

「へっく、有難いことで、三輪の親分が大層氣の毒がつてゐなすつたと、親分へ申して置きませうよ」

「ところでお静ちゃんは何うなすつたえ」

「これもお氣の毒みたいな話で、ツイ今しがたまで、おツ母アとあつしを相手に、泣いたり笑つたりして居ましたよ」

「本當かい」

「お隣で聞けば解りまさア」

「この櫛くしはお静さんのだつてね」

萬七は動かぬ證據の積りで、鼈べっかふ甲の櫛を見せました。

「お静さんのだつたら、何うなるんだ」

「氣の毒だが下手人の疑ひは免まぬれつこはねえ」

「ヘーエ」

「死體の側、それも血の海の中に落ちて居たんだ」

「さうですかい、もう一つ同じ櫛を持つて居る人があつたら何うします、三輪の親分」

「何だと？」

「ちよつと待つておくんなさい」

ガラツ八は飛んで行きましたが、暫くすると、ベロンベロンに酔拂つたお町を引つ擔ぐやうにして伴れて來ました。

「何だつて？ ああ雌猫めねこが殺された？ いゝ氣味だね、明日まで

生きて居りゃ、私が殺す積りだつたよ。あん畜生と一と晩い睚がみ合つたので、今日は氣色が悪くて仕様がなから、店を休んで朝か

ら呑んで居たんだよ」

いやもう滅茶々々の機嫌です。

「お町、人一人の命に關^かはることだ、確かりしておくれ。これだ、この櫛はお前のだらう」

ガラツ八は一生懸命でした。萬七の手から受取つた櫛をお町の朦朧^{もうろう}たる酔眼の前へ持つて行きます。

「私のだよ、誰が盗んで行きやがつたんだ」

「確かにお前のだね」

「お靜さんと一年前に對^{つゐ}に拵^{つゐ}へたんだよ。お靜さんのでなきア私のさ」

「目印はないかえ」

「そんな物があるものか、針で突いた程の傷も付けないのが自慢だつたんだ。誰が一體盗んで行つたんだ」

お町の言ふのは嘘らしくもありません。

「何時盗まれたんだ、出鱈目^{でたらめ}を言つちやならねえよ」

萬七は横合から口を出しました。

「出鱈目、チ、畜生、岡つ引ぢやあるまいし、お町姐さんが出鱈目を言ふかい。櫛は二月前に盗まれたんだ。町奉行所へ届出なかつたのが悪きア、何うともしやがれ」

お町の大地に崩折れるのを尻目^{しりめ}に、

「八兄哥、お静さんの疑ひは晴れたとは言へねえな」

萬七はニヤリとします。

「三輪の親分、お静さんは晝からズーツと此處へ來るまであつしと話して居たんですぜ」

八五郎は少しムツとした様子です。

「一つ穴だ、當^{あて}になるものか」

「三輪の、あつしが嘘をついたつて言ふのかえ」

「誰もそんな事は言はねえよ」

「お町は此間からお樂の阿魔^{あま}を殺すんだつて威張つて居たが、もう少し訊いてみちや何うです、え、親分」

「こんな酔つ拂ひに人間一人殺せるわけはねえ。無駄だよ、八兄哥——」

「ちや何うあつても」

「繩張外で氣の毒だが、平次兄哥では此調が六づかしからう。俺が代つてお靜さんの口を割つてやらなきアなるまい、どつこい」
三輪の萬七はさう言つて、お神樂かぐらの清吉を振向きました。何やら目くばせすると、苦い笑が二人の顔をニヤリと走ります。

「畜生ツ、そんな事をされちや錢形の親分の名折れだ、お靜さんを調べるなんて、俺が不承知だ」

八五郎は大手を擴ひろげて立塞がりました。

「馬鹿野郎、奉たてまつつて置きアイゝ氣になつて、手前達てめえ三下さんしたの知つ

たこつちやねえ、黙もくつて引込んで居やがれ」

「何を言やがる、手前てめえは仲間の誼よしみてえ事を知らねえのか、義理も人情もねえ野郎だ。それもお靜さんに少しでも疑ひがあるなら

兎も角、お静さんは、お袋と俺の側を一寸も離れちや居ねえんだぞ」

「うるさいツ」

「こんりんざい金輪際此處を通すものか」

「役目の表でもか」

「――」

「馬鹿野郎、ドヂを通らねえと、手前のやうになるとよ、ハツハツハツ」

清吉はこんな洒落をしやれ言ひ乍ら、八五郎の胸をドンと突きました。

「野郎、突きアがつたな」

飛びかゝらうとする八五郎。

「騒ぐな、八五郎、話は俺がつけてやる」

後ろからそつと肩に手を置いた者があります。

「何をツ」

振り返ると、八丁堀の旦那、吟味與力筆頭笹野新三郎が、微笑ふくを含んで立つて居るのです。

七

萬七とガラツ八の争ひの嵩かうずるのを惧おそれて、お品がそつと人を走らせ、笹野新三郎に助けを求めたのです。

調べは又最初からやり直し、何から何まで念入りに繰返しまし

たが、結局、お樂を殺す動機を持つて居る者は、お靜とお町の二人だけ。落ちて居た櫛くしは、二人のうち、何方かの物と決つて居りますが、お町は二月前に紛失、お靜は昨日落したといふだけで、これも水掛論に終りさうです。

お靜は到頭喚出されて、お町と一緒に調べられることになりました。騒ぎを聞いて丁度其處へやつて來たお靜は、其儘下手人の疑ひを受けて、皆なから冷たい眼で見られなければならなかつたのでした。

丁度其處へ、ノツソリと錢形平次が歸つて來ました。

「あツ、親分、大變な事になつた」

八五郎は飛付きました。萬七の側に引据ひきすゑられたお靜は、飛付

くこともならず涙一杯溜めて、平次の喜び勇む顔を見て居ります。「聞いたよ、お樂が殺されて、お静とお町が下手人の疑ひを受けてゐるつて話だらう、——お蔭で俺には、何もかも解つたやうな氣がする。旦那、御免なさいまし、三輪の親分、御苦勞様」

平次はさう言ふと、ツカツカと死體の側に寄り、提灯や手燭の明りで、恐ろしく念入りに調べ始めました。傷口から衣紋えもんから、その邊の大地まで、平次の眼からは、何一つ逃れやうがありません。

「大方見當がつきましたよ、櫛くしを見せて下さい、ホウ、これはお静のだ」

「えッ」

ガラツ八はいふ迄もなく、お静も、新三郎も、萬七までもびつくりしました。自分の女房を致命的な疑ひに引入れるやうな言葉です。

「何の邊に落ちてゐたんだ、誰が拾つた？ もとのやうに置いて貰はうか、——それで間違はないね、後で間違つたなんて言はれると困るが、何？ 目印が付けてあつた？ それは有難い」

平次はさう言つてもう一度櫛を取上げながら續けました。

「この櫛には血が着いて居ない、誰も拭きやしませんね、——尤も一度血の着いた櫛なら、拭いても齒の間に血が残つて居る筈だが、この櫛にはそんな跡あとはない、——血の中に入つて居て、血が着かないとすると、この櫛はお樂を殺した時落したんではなくて、

後から持つて来て、そつと置いて行つたものに違ひない。血が乾きかけてから置いたなら、櫛へは血が着かなかつたわけで――」

「――」

皆なは此一言ですつかり平次に征服されて了ひました。互に顔を見合せて、次の言葉を待つばかりです。

「自分の持物を死體の側へ持つて来る者はないから、この下手人はお静でもお町でもありませんよ」

平次は笹野新三郎の方を向いてかう言ひます。

「――」

皆なホツと溜息ためいきを吐きました。わけてもガラツ八の喜びやうといふものはありません。

「それから、こんな袋路地の奥へ湯歸りのお樂を連れ込むのは、知つて居る者でなきアならないが、女ぢやありません。後ろから突いたから、一應女と思ふのも尤もだが、女があひくち首を持つて向う突きにしたとすると、傷口は上うはむ向く筈だ——第一返り血が大變だから、其邊にウロウロして居ると直ぐ見つかる」

「――」

「これは、お樂を胸に抱いて、後ろへ手を廻してあひくち首を背中に押し當てるやうに、恐ろしい力で突き下げた傷だ。これなら返り血を浴びる事もなし、傷口が下向になつてゐるのが何よりの證據だ。それから、お樂の手の爪の中につむぎ紬の糸屑が、ほんの少しだが入つて居る、抱き附いて背中を刺された時か搔きむしつたんだね、

紬を着るのは大概男だ」

「――」

何といふ明察でせう。萬七は一句もなく首を垂れました。

「一體下手人は誰だ、平次、話して見るがいゝ、お前には解つて居るやうだが――」

笹野新三郎は耐へ兼ねてかう言ひました。

「最初から申しませう。九月十三夜に、兩國橋で私は身投女を救ひ上げました。これがお樂で、三人組の大泥棒、香三郎の妹で御座います。側に居た船へ引上げて貰はうとすると、その船の船頭が櫂かいを振り上げて私を打たうと構へたのです。幸ひ月見船が二三艘さう居たので、私も命拾ひをしました。これは唯事でないと思つ

たから、其處からお樂を引取つて、少し見て居ることにしたので
す」

「――」

平次の話は奇つ怪でした。調べて見るとお樂は房州生れの河童かつばで、水で死ぬやうな女ではありません。兄の仇を討ちたさ、夫の仕事を手傳ふ積りで、平次の通るのを知つて狂言身投をやり、あはよくば水の中で打ち殺し、やり損じたら、一と芝居打つて、平次の家へ入り込み、平次を何とかして亡き者にしようと思つたのでした。

「笹屋源助といふのはお樂の亭主で御座います、それは後で解りました」

平次はかう續けます。

——お樂は平次の家へ入込みましたが、平次に心こころ惹かれて殺す心が鈍にぶり、その代りお靜を殺さうと計畫したのでした。平次はお靜危ふしと見て、わざと腹を立てた振をしてお靜を母親の許に返し、直ぐ様怪しいと睨んだ笹屋源助の身許を探し始めました。これがお樂の亭主だつたことは言ふ迄ありません。

お品を呼出した手紙を、平次が手を廻して笹屋の亭主の書いたものと比べると、寸分違はぬ同じ筆でした。笹屋の源助は、女房お樂の心こころ變かはりを知つて平次と一と晩一緒に置くのを氣遣ひ、お品をおびき出してその番人にしたのです。お町が飛込んで來たのは、これは源助にも豫想外だつたでせう。

——笹屋の源助は三人組大泥棒の首領房吉の變名だつた事は言ふ迄ありません。お樂が自分を裏切つて、自分と三平の在所ありかを教へようとしたのを聞いて、始めて殺意を生じ、いよく打明けるといふ今晚、錢湯へ行つたお樂を蹤つけて、この路地に誘さそひ入れ、いろ／＼に説き立てたのですが、お樂はすつかり氣が變つて源助の言ふ事を聞かなかつたので、前から抱き寄せるやうにして、隠し持あひくちつたヒ首で一と突きにしましたのです。

「櫛くしは、源助がチヨイチヨイ私の家へ来るうち、何かの役に立てようと思つて持つて行つたのでせう。どうかしたら、昨日お靜が飛出す時、あわてゝ落したのを拾つつたものかもわかりません」

平次はかう説明して、一度辛つらく當つたお靜へ、——勘辨しろよ

——といった優しい眸ひとみを送りました。お静はもう嬉し泣きに泣いて、それも氣の付かない様子です。

「ところでその笹屋の源助といふのは何うした、急いで手配しなければなるまい」

と笹野新三郎。

「それには及びません、あれで御座います」

指す人込の中から、一人の男、身をひるがへ翻して逃げ出さうとするの

を、早くも平次の手から飛んだ投げ銭、一枚はその項うなじを、一枚は背を打ちます。

「あッ」

ひるむところを、何處を何う飛込んだか、親分の氣を知ること

の早い八五郎は、サツと飛込んで後ろから組附きました。

「これが笹屋の源助か」

笹野新三郎は、物優しくさへ見える縄付を顧み^{かへり}ました。

「さうで御座います、三人組の首領^{かしら}で、人殺し房吉といふ、恐ろしい男で御座います」

平次は驕^{おご}る色ありません。

「さうと知つたら、逃げるんだつた。手前^{てめえ}の話に釣られて、到頭年貢^{ねんぐ}を納めさせられるよ」

房吉は口惜しさうに齒咬^{はが}みをします。

「ガラツ八は最初からお前の側に付いて居たよ、俺の眼の動き一つで、何でも讀むのが八五郎の藝だ。逃げた筈の三平も、今頃は

捕つて居るだらう。それも手配をして置いたよ」

平次は事もなげにかう言ひます。

「錢形の親分、お前さんはお靜さんを捨てちやならないよ。お靜さんを泣かせると、このお町が承知しないから」

酔つ拂ひのお町はフラフラと立ち上がると、お靜の頸つ玉に嚙^{かじ}り付いて、泣き出してしまいました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十二巻 鬼女」同光社磯部書房

1953（昭和28）年8月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1933（昭和8）年12月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

平次女難

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>